

(1) 筋量サルコペニアが運動器の経年的変化に与える影響

川崎医療福祉大学医療技術学部リハビリテーション学科理学療法専攻 ○松本 浩実

【目的】

筋量サルコペニアの有無が運動器の経年的変化に与える影響を調査すること。

【方法】

対象は鳥取県在住の一般高齢者である。取り込み基準は1) 歩行障害のないもの、2) 日常生活が自立しているものとし、要介護認定者は除外した。平成27年から29年の3年間で203名が本研究のベースラインに登録された。本研究は鳥取大学医学部倫理審査委員会の承認を得て行った (No.2354)。ベースライン評価として基本属性、過去1年間の転倒歴、仕事の有無、併存疾患の有無、服薬状況を聴取した。Asian Working Group for Sarcopenia の基準に従い体組成計にて四肢骨格筋量を計測し、男性7.0kg/m²、女性5.7kg/m²未満のものを筋量サルコペニアと定義し2群に分けた。フレイルの指標として基本チェックリストを使用した。運動器評価は足腰の痛み (Visual analogue scale :VAS)、定量的超音波法による踵骨の Speed of sound (SOS) 値、握力、歩行速度とステップ長及び円背指数を測定した。その後2年間年1回、同様の検査を実施した。統計的分

析は2群間の比較を対応のない t 検定と X^2 検定、年数と筋量サルコペニアの有無による相乗効果については分割プロットデザインによる二元配置分散分析を行った。有意水準は5%未満とした。

【結果】

73名 (平均年齢74.7歳、男性28名、女性45名) が解析対象となった。ベースライン評価時、筋量サルコペニア群はなし群と比較し、有意に体重、BMI が低く変形性股関節症及び脊柱管狭窄症の割合が高かったが、運動器評価項目においては両群に有意な差はなかった。二元配置分散分析の結果、基本チェックリスト点数にて年数の主効果が見られたが、筋量サルコペニアとの交互作用は認められなかった ($p=0.055$)。一方、SOS では二要因に有意な交互作用が見られた。

【考察】

年数と筋量サルコペニアの有無は骨量変化のみ相乗効果を認めたことから、筋量サルコペニアを有する場合、骨量変化には注意を払う必要がある。また筋量サルコペニアでは、そうでないものと比較しフレイル化しやすい可能性がある。